「城下町における陸軍施設計画の史的機能について」
ー　明治・戦後の都市構造の「読み替え」の事例として　ー

建設工学専攻（修士課程）　502132　佐藤（さとう） 善幸（よしゆき）
建築史研究　　指導教員：　伊藤 洋子　教授

第１章　研究の背景・目的

1－1　研究背景・目的

われわれは過去を扱うとき、実際には過去の亡霊を扱っており、その亡霊の復活によってわれわれは現在の自分たちのジレンマに直面することができる。

――ミシェル・フーコー

日本陸軍に関わる都市的現象を「建築の分野で誰も記述していない」のは、あまりにも気妙である。空白を埋めるという意味からも、時代を生きた証人達の現存中に研究の俎上に載せておく必要があるし、われわれの世代においても、特に当該事項に関しては、歴史を継承し、再構築する義務があると考える。

1－2　研究対象・枠組み

本研究では、主に明治期に建設された陸軍施設を対象とし、遡及的に城下町の変遷を捉える。城郭内を陸軍が占拠した都市を中心に、「明治政府は近世都市をどう認識し、近代的な都市を建設しようとしたか」そして、「敗戦を経て、不要となった陸軍施設はどのように扱われたのか」この２度の歴史的転換を日本の諸都市はいかに乗り越えてきたのかを陸軍施設を対象に、都市構造の「読み替え」という視点で分析する。既存の都市骨格との関係からみた陸軍施設の設置場所に重点をおいた考察を行ない、変容パターンを類型化している。

第２章　既往研究の整理と本研究でのアプローチ

2－1　既往研究について

江戸ー東京の都市的変遷は、陣内秀信氏や、越澤明氏によって記述がされてきた。さらに、佐藤滋氏による論文は体系的に全国の城下町の近代化を網羅し、秀逸である。しかし、これらの記述では意図的に日本陸軍に対する記述が避けられ、あるいは最小限に記述され、主題になることはなかった。陸軍関係資料が終戦直後に意図的に抹消された事実も、このような傾向を後押ししているようである。しかし、時代は変わりつつある。従来から盛んであった政治史や思想史、社会学などの研究に加え、近年は考古学、地理学の参入が顕著で、都市的な言説にも寄与してきている。これら他分野を含む先行研究の断片的な材料も、本研究における考察の土台を与えた重要なものである。ここでは、それら既往研究の整理を行なう。

2－2　「伝統の創出」

陸軍施設を語るには、その史的外部性を明らかにしなくてはならない。ここでまず、国家形成における伝統と景観の形成に関して言及したい。D・ローウェンタールによれば、国家形成のプロセスは各々の時代に相応しい「伝統の創出」を伴い、それらは帰属意識の表象としてロマンティックな観点から過去を説明し、国民形成を正当化するのに寄与してきたという。つまり、歴史は継承されるばかりではなく、その時々の必要に応じて修正されてゆく。都市景観の形成もこの運動と基本的に整合的である。ここでは「伝統の創出」の機構の具象的表出の端的な例として、日本陸軍と城下町の関係を分析する。

2－3　「読み替え」と「記憶の景観形成」

発足当初のジリ貧の明治政府は、早急な政権交代の表明として、江戸城を皇居に、上野や芝などの寺社地を公園に読み替えた。「明治の東京は、江戸の読み替え作業からはじまった」とは鈴木博之氏の言説であるが、実際には東京ばかりでなく、全国土で都市の読み替えが行われた。そしてその「読み替え」は、戦後にも行われるが、２度とも陸軍と城下町を中心に展開される。この「読み替え」には、過去の認識と将来像が端的に表れ、そこには時代の意思が見え隠れする。ここに派生する機構こそが「伝統の創出」でもある。この都市の「読み替え」という現象に、ケネス・E・フットが近著で展開した「記憶の景観形成」プロセスにおける概念(「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」)を引用し、陸軍施設の分析に役立てる。

第３章　陸軍施設計画の概観

3－1　象徴の破壊

近世城郭の天守閣のうち現存するのは12城のみである。政治、軍事の拠点であり、旧体制の象徴でもあった城郭は、近代統一国家建設の障害とみなされて多くが「抹消」された。城郭廃棄令によって破却された城郭は144 城にのぼる。日本の都市の景観が一変したはずである。旧武家階級からの激しい抵抗があったのは無理もない。しかし、実はこの時点で41 城が残っている。残りの半数が、旧藩主や地方自治体からの願い出から処分されていったことも事実である。残った城郭に関しても、そのまま放置されたり、姫路城にいたっては23 円 50 銭で売却されるという状態であった。当時の雰囲気が察せられる。存城となった城郭のうち、14 城には、陸軍施設が配置される。奇異なことに、前時代の象徴として破壊したはずの城郭が残る場所に多くの陸軍施設が計画されたのである。陸軍の写真(fig.1、2)を見ると、連隊の背景に城郭が収められているものが目につく。後に残った城郭の存在は軍隊士気の高揚に機能したという側面も否定できない。

fig.1：新発田城と歩兵十六連隊営

fig.2：名古屋城と第三師団練兵風景

3－2　近代陸軍建設の特徴

旧城下町のうち城郭内を陸軍施設が建設されたのは、22 都市である。現在の政令指定都市は全てこのなかに含まれる。城下町の構造が分化していく要因の１つに、軍事機能の集中が挙げられる。徳川封建制においては三百諸侯に分割され軍事力は国土に散在的であったが、明治政権下においては、軍隊の構成を徴兵管区ごとに分割し、その中心都市に軍事力が集中する。特に師団司令部のおかれた都市は軍都と化し、人口が集中する。軍事機能の置かれなかった都市は、一時都市核を喪失し、さらに城郭と密接な関係をもつ堀がこの時期に埋め立てられ、その上に新たな建設も進む。都市構造が開放的になると同時に、独特な景観が失われてゆく。一方、陸軍施設が占有した場合は、堀の埋め立てなども行われず、場所の特殊性は失われず、「聖別」された空間として継続したといえる。

第４章　地域別に見る陸軍施設群の歴史上の空間展開

4－1　各都市における陸軍施設の展開

ここでは、当該都市における陸軍施設の展開を分析する。地域論的記述よりも形態論的アプローチを優先し、次章に役立てる。地域ごとの陸軍施設の展開による都市の変容をヴィジュアルに示す(fig.3)。考察はそれぞれ以下のような項目で行っている。

1：近世城下町構造の「読み替え」の分析
2：戦後の陸軍施設の「読み替え」の分析
3：城郭の変遷について
4：陸軍遺構の現状と利用
5：都市計画のなかでの城郭と日本陸軍施設の史的役割

また、地域によって既往研究にかなり斑があるので、参考資料などは明確に示す。

第５章　「読み替え」による陸軍施設群の変容パターン類型

5－1　類型分類

ここでの目的は、国家的視野で行われた近代の計画が齎した都市の変容を差異化し、その具象化した偏差から現在を読み取ることである。特に政治や都市に関する問題を一元的に結論づけることは不可能であろうが、編成時期によって形式が更新されていることから、変容の指標を明示できる可能性がある。近世城郭に対する施設計画の特徴から分類化し(fig.4)、日本陸軍の成長を継時的に追いながら、その形式が変遷してゆく過程を示す(fig.5)。明治期における類型分布の大きく変わる契機として、鎮台期、師団形成期、日清戦争後の明治 29 年の第一次拡張期(四個師団増設)、日露戦争後の明治 39 年の第二次拡張期(六個師団増設)の四期が挙げられ、陸軍施設は次第に近世構造から分離してゆく。

第６章　補講（昭和期の建設について）

6－1　昭和の陸軍建設

本論文においては、明治期の建設を主とし、昭和期に関しては除外した。理由は２つある。昭和期においては、城郭内に新たに建設された事例がなく、趣旨に合わないこと。さらに施設配置の一般化や、建築物の質的な低下が大正期以降は見られ、戦後真先に処分されたものが多いことなどが挙げられる。しかし、興味深い事例がいくつかあり、そのなかから特に城郭等に関わるものについて考察しておく。

第７章　陸軍の消滅とその後の「読み替え」

7－1　陸軍施設であった場所の現在

戦後、我国は正式の軍隊を持たない。ゆえに戦前に大都市の中枢部に広大な面積を有した陸軍の敷地は、再び「読み替え」られたが、その変容のプロセスも、地域ごとに異なる。公園を中心とした公共空間となるケースや、官庁街が再び戻ってくるケース、戦災復興住宅から住宅地へと変貌したケースなどがある。そして陸上自衛隊が引き継いでいる場合も多い。各々の転用先から、再び類型化して示す。

7－2　陸軍遺構について

明治４年の廃藩置県により、全城郭は兵部省の管轄となり、明治６年に発せられた城郭廃棄令によって、そのほとんどが破却され、明治の終わりには 18 城しか残らなかった。その後 70 年余りにわたって陸軍が城郭内を占拠したのである。しかし、皮肉なことに、陸軍によって廃棄された城郭は、敗戦以後次々と復元される一方、陸軍遺構は葬られ、現在に至っては、師団司令部は４棟しか残っていない。のみならず、現在民間に解放されているものは、そのうちのさらに１棟だけである。ここでは、現存する陸軍遺構が、どのようなプロセスを経たものかを記す。

7－3　自衛隊に移管された施設に関して

現存する陸軍遺構のうち幾つかは、博物館や大学などに転用されて活かされているが、取り残され、その評価が未だ定まらないものもある。それらの多くは自衛隊に移管され、人目につかずに存在してきた建造物である。本研究の直接の契機は、これら防衛庁所管の旧陸軍遺構調査の経験である。自身の参加した調査により、残された建造物にも調査のメスが入り、ついに現存する陸軍遺構の全貌が明らかになるというタイミングにも恵まれた。調査のなかでの自衛隊や、近隣住民に対するヒアリングも有意義であったが、現状での問題点も明らかになった。歴史的な背景を踏まえて、今後の陸軍遺構の展望を考察する。

終章　各章の要約と総括

e－1　陸軍施設計画の都市史的意味について

ここまでは陸軍施設の類型化を中心に、近世城郭の構造が「読み替え」られ、城郭や城下町のその後の変遷に影響を与える様子を観察してきた。「象徴の破壊」、「軍事施設優先の都市計画」、「近世構造からのスプロール」等、問題をいくつか発見したが、明治期は主に城下町の構成原理を踏襲し、その機能的矛盾に比すれば、強引なプラニングは避けられている場合が多い。軍関係の施設が成長拡大し、広域に分散してゆく一方、機能的矛盾を抱えながらも、主要な城郭には最後まで居座り続けたことが興味深い。例外なく都市構造的かつ地勢学的な閉鎖性やヒエラルキーを決して放棄せず、敗戦まで城郭を意図的に軍隊士気の高揚に利用し続けたのである。戦後には城郭と陸軍の評価は急激に逆転し、50 余りの天守閣が復元されている現状も踏まえて、陸軍施設計画に対する史的考察をまとめる。

e－2　終わりに

記憶とは、その時々の必要に応じて修正される。過去の事実が実際にどうであったかがよりも、むしろ現在の状況に照らして理解可能となるように、恒常的にわれわれは過去をつくり変えている。かように歴史が常に構成の対象であるならば、各々の時代に再構成すべきモノが存在するとも言える。

日本陸軍に関わる過去は、これから解消してゆかねばならない国際的問題も内的な問題もいまだに抱えており、傍観しているわけにはいかない。本研究が、日本陸軍認識の一助となれば幸いである。

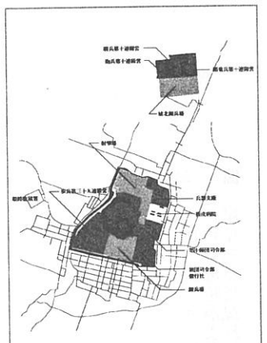


fig.3：明治 43 年の姫路の陸軍施設

fig.4：近世都市構造に対する陸軍計画の類型化

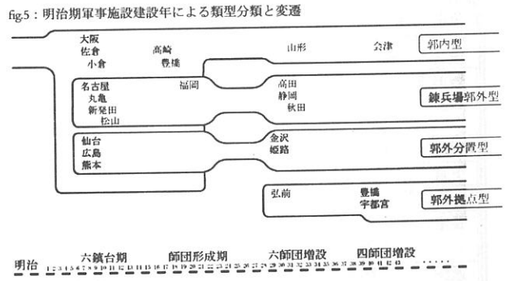
郭内型
近世の城郭の枠組みを踏襲し、城下へ拡散していない。
元来の城郭規模が大きいものに多い。
例：大阪、小倉、高崎、山形、会津、佐倉

錬兵場郭外型
錬兵場が郭外に存在する。近代兵器の利用等のために、徐々に錬兵場のみが溢れ出たタイプ。事例としては最も多い。
例：名古屋、秋田、新発田、松山、福岡

郭外分置型
城郭内に拠点を置きながら、さらに容積が必要となり、城外にスプロールした軍事施設を持つもの。
例：仙台、熊本、金沢、広島、姫路

郭外拠点型
城郭内と城下町の外に陸軍施設があり、かつ師団司令部等の統括機能が城郭外部に置かれている。
例：弘前、宇都宮、豊橋

fig.5：明治期軍事施設建設年による類型分類と変遷



主要参考資料

旧陸軍省『密大日記』『建築要領草案』他、防衛研究所所蔵、M26～S17
旧日本陸軍参謀本部測量局『２万分の１迅速測図』国土地理院所蔵、M23～T5
丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版、1952
佐藤滋・他「近世城下町を基盤とする地方都市の都市構造の類型化」
『日本都市計画学会学術研究論文集 27 号』1988
中森勉「戦前期の金沢城跡における陸軍施設の建設過程について」
『日本建築学会北陸支部研究報告集第 41 号』1998